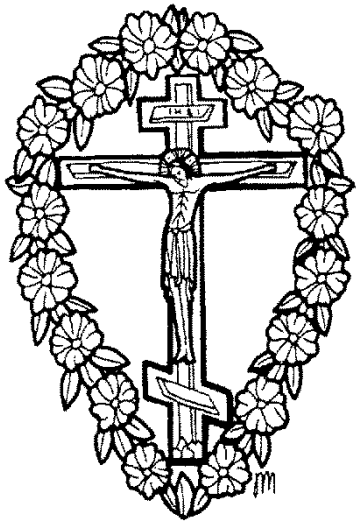


聖大金曜日

晩　課

2016 OSAKA

晩 課　聖大金曜日

輔祭　君よ、祝讃せよ。

司祭　父と子と聖神の國は崇め讃めらる、今も何時も世世に。

（詠）「アミン」。

誦経、我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

天の王、慰むる者よ、眞實の神、在らざる所なき者、滿たざる所なき者よ、萬善の寶藏なる者、生命を賜ふ主よ、來りて我等の中に居り、我等を諸の穢より潔くせよ、至善者よ、我等の靈を救ひ給へ。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

主憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。

司祭　蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

誦経　「アミン」。

主 憐 めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

來れ、我等の王・神に叩拜せん。

來れ、ハリストス我等の・神に叩拜俯伏せん。

來れ、ハリストス我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。

首誦聖詠

我が 靈 よ、主を讃め揚げよ、主我が神よ、 爾 は至りて 大 なり、 爾 は光榮と威嚴とを 被 れり。 爾 は 光 を 袍 の如くに衣、天を幔の如くに張る、水の上に 爾 の宮を建て、雲を 爾 の 車 と爲し、風の 翼 にて行く。 爾 は風を以て 爾 の使者と爲し、焔 を以て 爾 の役者と爲す。 爾 は地を固き 基 に建てたり、此れ世世に動かざらん。 爾 は淵を以て衣服の如くに之を覆へり、山の 巓 に水立つ。 爾 の恐嚇に依りて此れは奔り、 爾 の 雷 の聲に由りて 速 に去る。山に升り、澗に降り、 爾 の此れが爲に定めし 處 に至る。 爾 界 を立てて之を踰えざらしむ、反りて地を覆わざらん。 爾 は 泉 を澗に 遣 せり、山の 間 に水は流れ、野の 諸 の 獸 に飲ましむ、野の 驢 は其 渴 を止む。空の鳥は其 傍 に棲み、枝の 間 より聲を出す。 爾 は上なる宮より山を 潤 し、地は 爾 の造工の果にて饜き足れり。 爾 は草を 獸 の爲に 生ぜ しめ、野菜を人の 需 の爲に 生ぜ しめて、地より 食物 を出さしむ。酒は人の 心 を 樂 ませ、 膏 は其の 面 を 澤 し、餅は人の 心 を 養 ふ。主の樹、其植えたるリワンの栢香木は饜き足れり、鳥は其上に巣を造る、松は鶴の棲處たり、高き山は鹿の爲、磐石は 兎 の爲に避所たり。主は月を造りて時を定め、日は其入る 處 を知る。 爾 暗 を布けば、 則 夜あり、其時 林 の 獸

皆出で廻る、獅は獲物の爲に吼えて、其食を神に乞ふ。日出づれば、彼等集りて己の穴に伏す。人は其工作の爲に出で、勞きて暮に至る。主よ、爾の工業は何ぞ多き、皆智慧を以て作れり、地は爾の造物にて滿ちたり。夫の大にして廣き海、彼處には無數の動物、大小の生物あり、彼處には舟通ひ、彼處には彼の大魚あり、爾造りて其中に游ばしむ。彼等は皆爾が時に随ひて食を予ふるを待つ。之に予ふれば受け、爾の手を開けば賜に饜かせらる、爾の顔を隠せば惶れ惑ひ、其氣を取り上ぐれば死して塵に歸る。爾の氣を施せば造られ、爾は又地の面を新にす。願はくは光榮は世世に主に在らん、願はくは主は己の造工の爲に樂まん。彼地を觀れば、地震い、山に觸るれば、煙起つ。我生ける中主に歌ひ、世を終るまで我が神に歌わん。願はくは我が歌は彼に悦ばれん、我主の爲に樂まん。願はくは罪人等は地より消え、不法の者は存するなけん。我が靈よ、主を讃め揚げよ。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

「アリルイヤ」「アリルイヤ」「アリルイヤ」、神よ、光榮は爾に歸す。三次

【大連祷】〈通常のメロディ〉

輔祭　我等安和にして主に祷らん、　**（詠）　主憐めよ**

輔祭　上より降る安和と我等が靈の救の爲に主に祷らん、

輔祭　全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に祷らん、

輔祭　此の聖堂、及び信と愼と神を畏るる心とを以て此に來る者の爲に主に祷らん、

輔祭　教會を司る我等の（府）主教（　　）、司祭の尊品、ハリストスに因る輔祭職、悉くの教衆、及び衆人の爲に主に祷らん、

輔祭　我が國の天皇、及び國を司る者の爲に主に祷らん。

輔祭　此の都邑と凡の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に祷らん、

輔祭　氣候順和、五穀豐穣、天下泰平の爲に主に祷らん、

輔祭　航海する者、旅行する者、病を患ふる者、艱難に遭ふ者、虜となりし者、及び彼等の救の爲に主に祷らん、

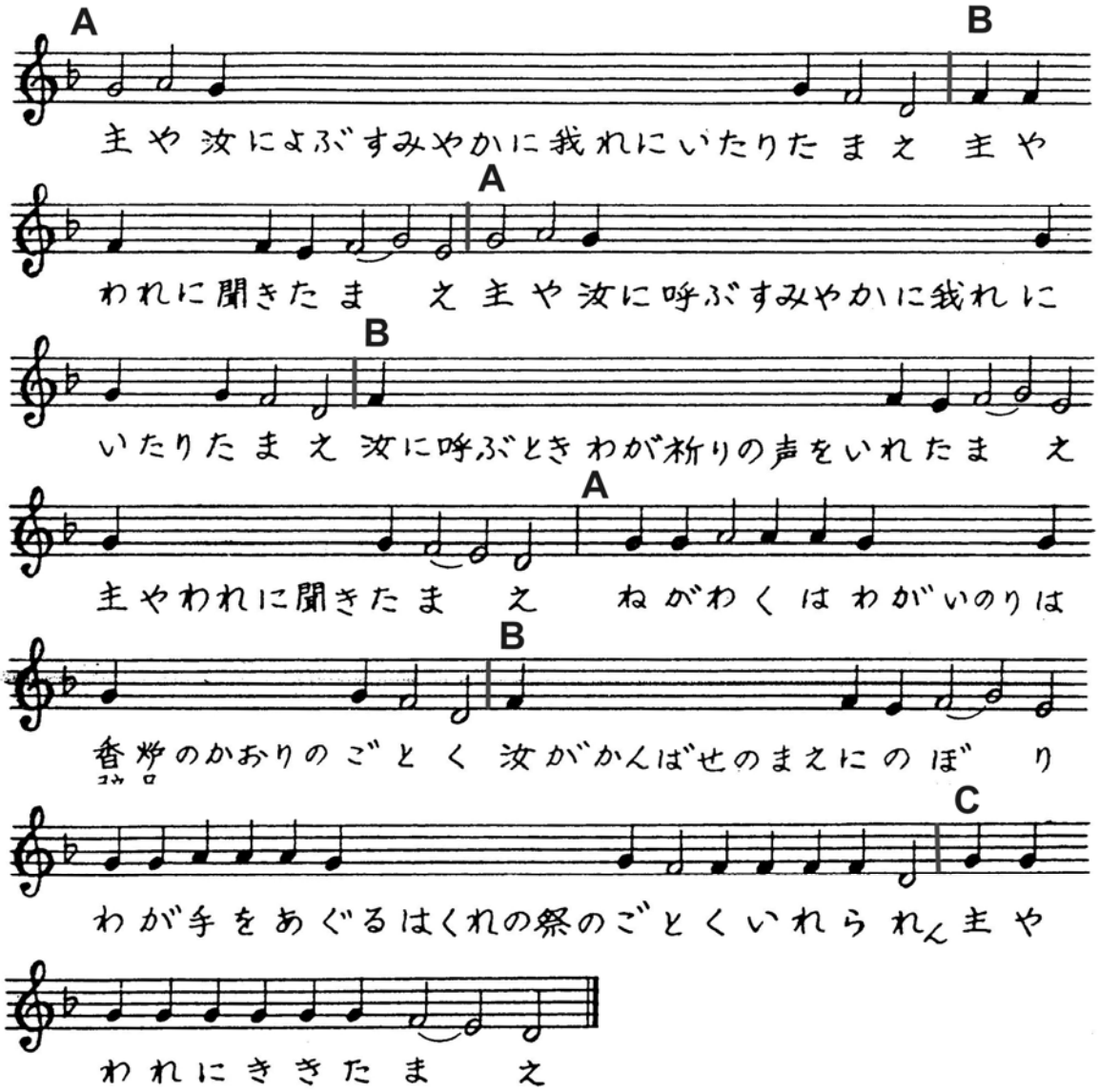
輔祭　我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に祷らん

輔祭　　神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救ひ憐み護れよ、

輔祭　　至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光栄の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、　　**（詠）　主爾に**

司祭　　蓋凡そ光栄尊貴伏拜は爾父と子と聖神°に帰す、今も何時も世世に、**（詠）「アミン」**

（詠）　［主よ汝に呼ぶのスティヒラ］第140聖詠（1調で）



（続けて）

誦經　主よ、我が口に衞を置き、我が唇の門を扞ぎ給へ、我が心に邪なる言に傾きて、不法を行ふ人と共に罪の推諉せしむる毋れ。<中略>

我が聲を以て主に籲び、我が聲を以て主に祷り、我が祷を其前に注ぎ、我が憂を其前に顯

せり。我が 靈 我の衷に弱りし時、 爾 は我の途を知れり、我が行く路に於て、彼等は竊に我が爲に網を設けたり。我右に目を注ぐに、一人も我を認むる者なし、我に遁るる所なく、我が 靈 を 顧 る者なし。主よ、我 爾 に呼びて云へり、 爾 は我の避所なり、生ける者の地に於て我の分なり。我が籲ぶを聽き給へ、我 甚 弱りたればなり、我を迫害する者より救ひ給へ、彼等は我より強ければなり。

第一調

句　主よ、若し 爾 不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども 爾 に赦 あり、人の 爾 の前に敬ま ん爲なり。

ハリストスよ、悉 くの造物は 爾 が十字架に懸れるを覩て、畏懼に因りて變ぜり、日は晦み、地の 基 は震へり、萬物を造りし者と偕に萬物は苦しめり、甘んじて我等の爲に忍びし主よ、光榮は 爾 に歸す。

句　我が 靈 主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより 甚 し。願はくはイズライリは主を恃まん。　第二調

不虔不法の民よ、何爲れぞ 徒 に謀る、何爲れぞ萬有の生命を死に定めたる、大 なる哉奇蹟、世界の造成主は不法者の手に付され、人を愛する者は木の上に擧げらる、地獄に 擄 にせられて、寛忍なる主よ、光榮は 爾 に歸すと籲ぶ者を釋かん爲なり。

句　蓋 憐は 主にあり、大 なる 贖 も彼にあり、彼はイズライリほ其 悉 くの不法より 贖 はん。

言 よ、無玷なる童貞女は今日 爾 が十字架に擧げらるるを覩て、母の 情 を以て泣き、 大 に心 を傷め、 靈 の深處より痛く歎き、膺を拊ちて憂ひて呼べり、哀しい哉神聖なる子や、哀

しい哉世界の光や、神の羔よ、何ぞ我が目より隠れたる、故に無形の軍は慄きて曰へり、測り難き主よ、光榮は爾に歸す。

句　萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ。

ハリストスよ、種なく爾を生みし者は爾萬物の造成主及び神が木に懸れるを覩て、悲しく呼べり、吾が子よ、爾が姿容の美しきは何に隠れたる、我爾が不義に、十字架に釘せらるるを見るに忍びず、速に起きよ、我も爾が死よりの三日目の復活を覩ん爲なり。

句　蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。　第六調

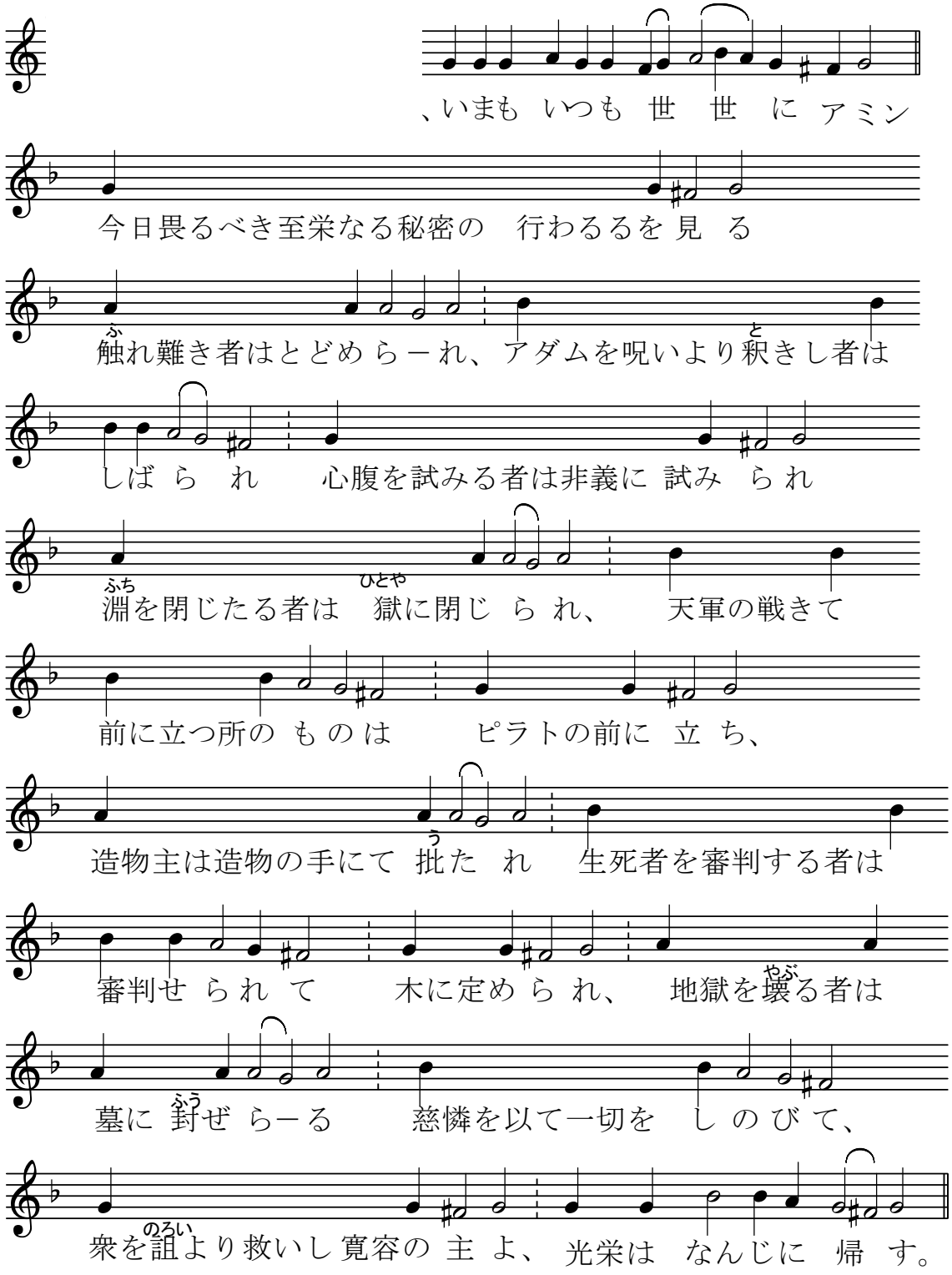
今日造物の主宰はピラトの前に立ち、萬有の造成主は十字架に付され、甘んじて羔の如く牽かれて、釘を以て釘せられ、脅を刺さる、「マンナ」を雨らしし者は海絨を以て飲ませられ、世界を拯ふ者は頰を批たれ萬物の造成主は己の諸僕より嘲けらる、嗚呼主宰の仁愛や、釘する者の爲に己の父に祈りて曰ふ、父よ、彼等に此の罪を免せ、蓋不法の者は如何なる不義を行へるを知らず。

光榮は父と子と聖神に歸す。

嗚呼不法の會は何如に諸恩に恥ぢずして造物の王を死に定めたる、主は諸恩を記憶せしめて彼等に謂へり、我が民よ、我何をか爾等に爲しし、我奇蹟を以てイウデヤを滿てしにあらずや、一言を以て死者を復活せしめしにあらずや、諸病諸疾を醫ししにあらずや、爾等何を以て我に報いたる、何ぞ我を記憶せざる、醫治に代へて我に傷を加へ、生命に代へて我を死し、我恩者たる者を悪者の如く、立法者たる者を不法者の如く、萬有の王たる者を定罪せられし者の如く木に懸けたり。寛忍の主よ、光榮は爾に歸す。

今も何時も世世に、「アミン」

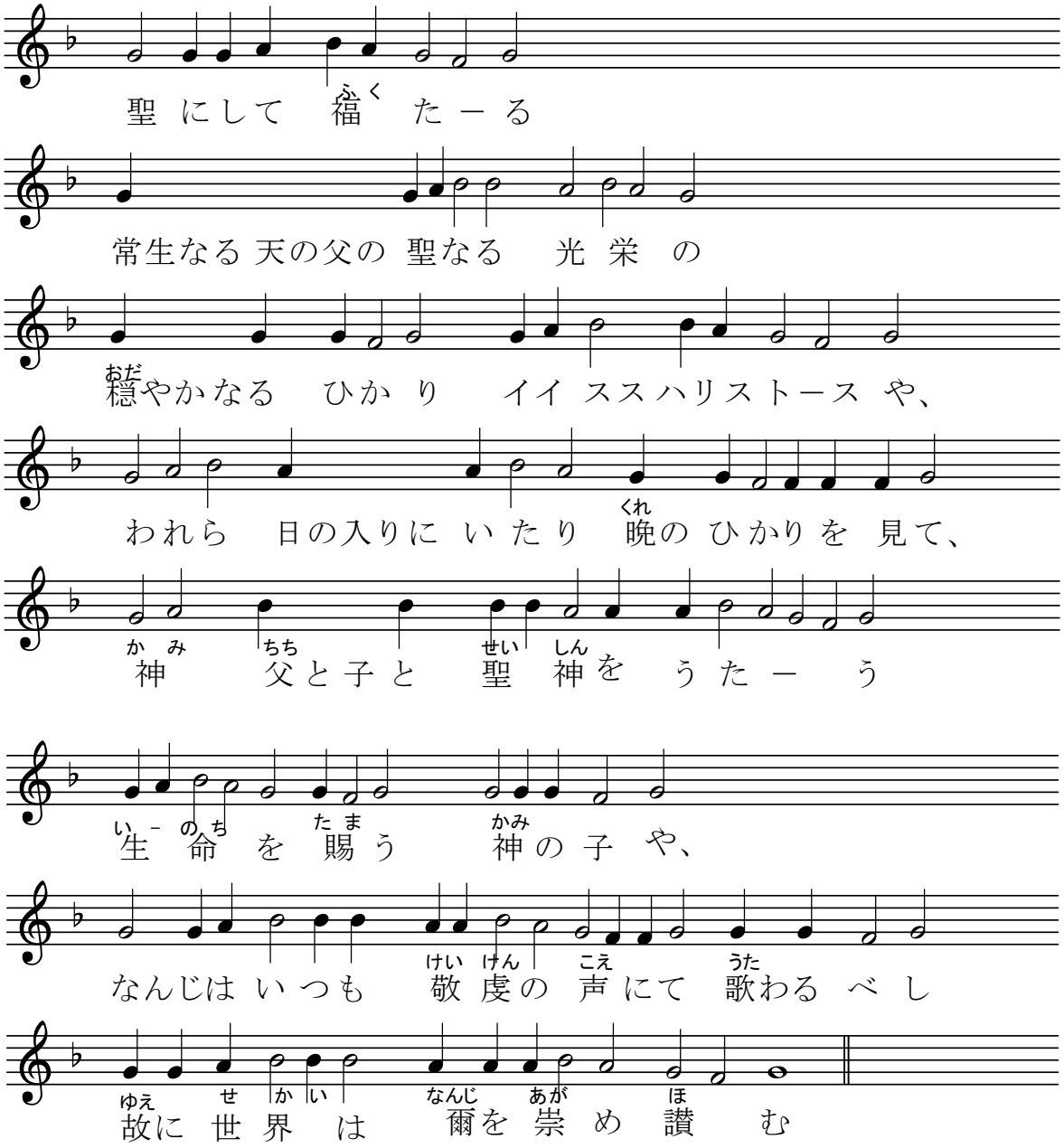
［生神女讃詞］６調　今日畏るべき至栄なる秘密の行はるるを見る。触れがたき者はとどめられ、アダムを詛より釈きし者は縛られ、心腹を試みる者は非義に試みられ、淵を閉じたる者は獄に閉じられ、天軍の戦きて前に立つ所の者はピラトの前に立ち、造物主は造物の手にて批たれ、生死者を審判する者は審判せられて木に定められ、地獄を破る者は墓に封ぜらる、慈憐を以て一切を忍びて、衆人を詛より救ひし寛容の主よ、光栄は爾に帰す。



［聖入］

司祭　　睿智、謹みて立て。

（詠）　聖にして福たる常生なる、天の父の聖なる光栄の穏なる光イイスス・ハリストスよ、我等日の入に至り、晩の光を見て、神父と子と聖神゜を歌ふ。生命を賜ふ神の子よ、爾は何時も敬虔の声にて歌はるべし、故に世界は爾を崇め讃む。



輔祭　謹みて聽くべし。

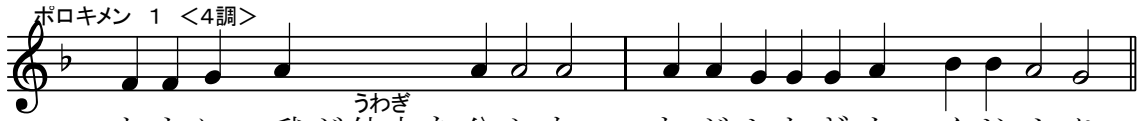
司祭　衆人に平安。

輔祭　睿智、謹みて聽(き)くべし。

誦經　**［ポロキメン］第２１聖詠、第４調、**

共に我が外衣を分ち、我が裏衣をくじせり。

（句）我が神よ、我が神よ、我に聽き給へ、何ぞ我を遺てたる。



ともに　我が外衣を分かち、　わが したぎを　くじせ り。

【エギペトを出づる記の読み】19章10-19

主はモイセイと面を合せて語りしこと、人がその友と語れる如し、後彼釋されて營に返り、其侍者、ナワィンの子イイスス、少き者は幕を離れざりき。モイセイ主に謂へり、視よ、爾我に謂ふ、斯の民を導き上れ、然るに誰をか我と偕に遣さんを未だ我に示さざりき。爾嘗て我に謂へり、我衆よりも爾を識る、爾我の前に恩を獲たりと、若し爾の前に恩を獲たらば、求む、己を我に示せ、我が明に爾を見ん爲、爾の前に恩を獲たる者として在らん爲、亦此の大なる族の爾の民なるを知らん爲なり。主彼に謂へり、我親ら爾の前に往き、爾を平安ならしめん。モイセイ彼に謂へり、爾若し親ら我等と偕に往かずば、我等を此より出す毋れ。我及び爾の民が爾の恩を獲たることは、如何にして誠に知るを得べきか、爾が我等と偕に往くを以てするに非ずや、然らば我及び爾の民は凡そ地に在る諸民に超えて光榮を獲ん。主はモイセイに謂へり、爾が言ひし此の事をも、我行はん、蓋爾は我の前に恩を獲たり、我衆よりも爾を識る。モイセイ曰へり、求む、爾の光榮を我に示せ。主曰へり、我我が光榮を爾の前に過ぎしめ、主の名を爾の前に宣べん。我恵まんとする者を恵み、憐まんとする者を憐む。又曰へり、爾は我が面を觀ること能はず、蓋人我が面を觀て、猶生くるを得ず。主曰へり、視よ、我に此の所あり、爾此の磐の上に立て、我が光榮の過ぐる時、我爾を磐の穴に置き、我が過ぎ去るまで、手を以て爾を蔽はん、我が手を除く時は、爾我が背を視ん、我が面は爾に現れざらん。

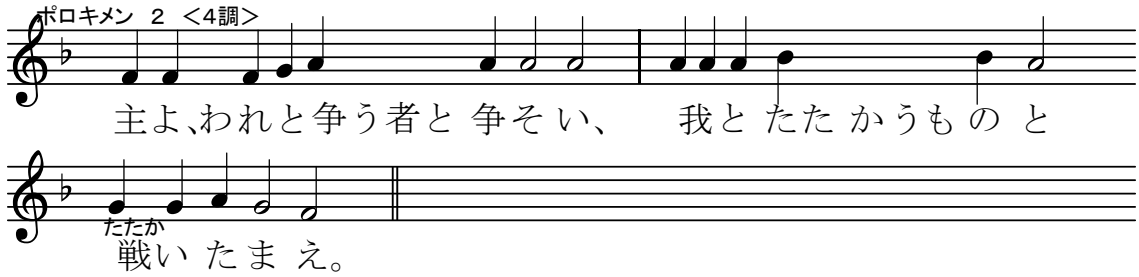
輔祭　謹みて聽くべし。

司祭　衆人に平安。

輔祭　睿智、謹みて聽くべし。

誦經　**［ポロキメン］第34聖詠、第４調、**

主よ、我と争ふ者と争ひ、我と戰ふ者と戰ひ給へ。（句）、盾と甲とを執り、起ちて我を助け給へ。



輔祭、睿智。

誦經　イオフ書の讀。　四十二章十二至十七節

輔祭　謹みて聽くべし。

主はイオフの終を祝福せしこと、其始に過ぎたり、彼の家蓄は綿羊一萬四千、駱駝六千、牛一千耦、牝驢馬一千ありき。彼に男子七人、女子三人生れたり。彼は第一女を晝と名づけ、第二をカッシヤと名づけ、第三をアマルフェヤの角と名づけたり。天下の中イオフの女の如く美しきはあらざりき、父は彼等に其の兄弟の間に産業を與へたり。イオフ病の後一百四十年生存せり、其年總て二百四十八年なりき、彼は其子、其子の子を見て、四代に及べり。斯くイオフは年老ひ日滿ちて死したり。

輔祭　睿智。

誦經　イサイヤの預言書の讀。　五十二章十三節至五十四章一節

輔祭　謹みて聽くべし。

誦經、主是くの如く言ふ、視よ、我の僕は善く進み、升り、擧りて、甚高くならん。多くの者が爾を見て驚きたる如く、（蓋其面は損はれしこと、凡人に逾へ、其容は損はれしこと、人の諸子に逾へたり、）是くの如く彼は多くの民を驚かさん、諸王は彼の前に其口を緘まん、蓋彼等は未だ曾て彼等に言はれざりし事を見、聞かざりし事を知らん。主よ、

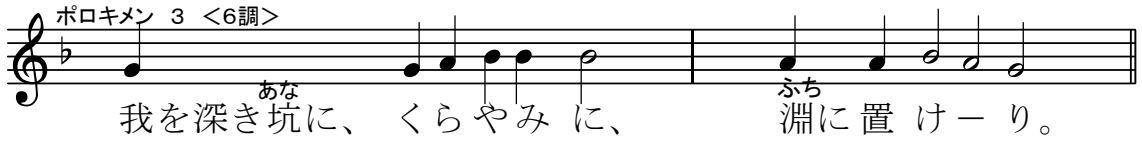
誰か我等より聞きし事を信じたる、主の臂は誰にか顯れたる。蓋彼は其前に出でしこと、萌芽の如く燥きたる地より發する根の如し、彼の中には姿容もなく、威嚴もなし、我等彼を見しに、其中に我等を慕はしむる美しき貌なかりき。彼は人人に藐とられ、憂愁の人にして、苦に習へり、我等面を彼より避けたり、彼輕んぜられて、我等彼を尊ばざりき。然れども彼は我等の恙を任ひ、我等の病を負ひたり、我等意へらく、彼は神より撻たれ、罰せられ、卑くせられたりと。然れども彼は我等の罪の爲に傷つけられ、我等の不法の爲に苦しめられたり、其身に受けし罰に因りて我等平安を獲、其傷に因りて我等醫されたり。我等皆羊の如く迷ひ、各轉じて其途に往けり、主は我等衆人の罪を彼に任はしめたり。彼は苦しめられたれども、甘んじて苦を受けて、其の口を啓かざりき、彼は羊の如く屠られん爲に牽かれたり、羔が其毛を翦る者の前に在りて聲なきが如く、彼は此くの若く其口を啓かず、其卑賤に居る時、彼に於ける裁判は行はれたり、然れども其來歴は孰か能く之を解かん、蓋彼の生命は地より取らる、我が民の罪悪の爲に彼刑を受けたり。其墓は犯罪者と偕に設けられたれども、彼は富める者の所に葬られたり、蓋彼は罪を行はず、其口には虚僞なかりき。彼を擊つこと主の旨に適へり、主は彼を苦に付せり、然れども彼の靈賠罪の祭を獻ずるに迨びて、彼其苗裔の永續するを見ん、主の旨は彼の手に由りて利達せん。彼は己の靈の功勞を見て滿足せん、彼我が義なる僕は彼を知る知識に由りて、多くの者を義と爲し、彼等の罪を任はん。故に彼は多くの者を繼ぎ、強き者の獲物を分たん、蓋其靈を死に付し、犯罪者と偕に算へられたり、彼は多くの者の罪を任ひ、罪人等の爲に轉達者と爲れり。妊まず、生まざる者、樂しめ、産に苦しまざる者、聲を揚げて呼べ、蓋棄てられたる婦

は、夫ある者に較ぶれば、更に多くの子あり。

輔祭　睿智。

［使徒のポロキメン］第 87 聖詠、第 6 調

我を深き坎に、闇冥に、淵に置けり。（句）、主我が救の神よ、我晝夜爾の前に呼ぶ。



［使徒の誦讀］コリンフ書 125 端、前書一章十八節至二章二節

輔祭　謹みて聽くべし。

誦經誦す、

兄弟よ、十字架の言は滅ぶる者の爲には愚なり、我等救はるる者の爲には神の能なり。蓋録して云へるあり、我智者の智を滅し、識者の識を廃せん。智者は安にか在る、學士は安にか在る、此の世の辯論者は安にか在る、神は此の世の智慧を愚と爲らしめしに非ずやと。蓋世は其智慧を以て、神を神の智慧に於て識らざりしに由りて、神は傳道の愚を以て、信ずる者を救はんことを喜べり。蓋イウデヤ人は休徵を乞ひ、エルリン人は智慧を覓む、然れども我等は十字架に釘せられしハリストスを傳ふ、此れイウデヤ人の爲には礙、エルリン人の爲には愚、惟召されたる者の爲には、イウデヤ人及びエルリン人を論ぜず、ハリストスは神の能及び神の智慧なり。蓋神の愚は人の智慧に過ぎ、神の弱は人の強に過ぐ。兄弟よ、爾等召されたる者の如何なる人たるを觀よ、肉に循ひて智慧ある者多からず、能ある者多からず、貴き者多からず。然れども神は世の愚なる者を選べり、智なる者を愧しめん爲なり、神は世の弱き者を選べり、強き者を愧しめん爲なり、神は彼の賤しき者、藐んぜらるる者、有るなきが如き者を選べり、有る者を廃せん爲なり、此れ凡の肉が神の前に誇

らざらん爲なり。爾等は神よりす、ハリストスイイススに在りてなり、蓋ハリストスは我等の爲に神に由る智慧と爲り、義及び成聖と爲り、贖と爲れり、録して、誇る者は主を以て誇るべしと、云へるが如くならん爲なり。兄弟よ、我が嘗て爾等に至りしは、爾等に言或は智慧の勝れたるを以て、神の證を傳へん爲に至りしに非ず。蓋我爾等の中に在りて、イイススハリストス、且其十字架に釘せられし事の外は、何をも知らざらんことを定めたり。

司祭　爾に平安。

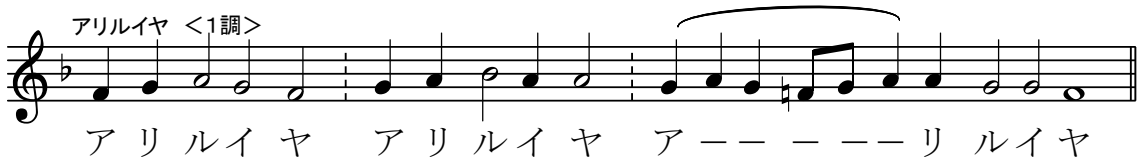
誦經　爾の神にも。

［アリルイヤ］第一調、

神よ、我を救ひ給へ、蓋水は我が靈にまで至れり。

（句）爾は我の心を裂き、我が疲は極れり。

（句）願はくは彼等の目は昏みて見るを得ざらん。



マトフェイ二十七章一至三十八節、 ルカ二十三章三十九至四十三節、 マトフェイ二十七章三十九至五十四節、 イオアン十九章三十一至三十七節、 マトフェイ二十七章五十五至六十一節

彼の時司祭諸長と民の長老等皆相會して、イイススの事を議せり、之を死に致さん爲なり。乃之を縛りて、曳きて方伯ポンティピラトに解せり。時に彼を賣りしイウダは其定罪せられたるを見て、悔ひて銀三十を司祭諸長と長老等とに返して曰へり、我辜なき血を付して、罪を犯せり。彼等曰へり、我等何ぞ與らん、自ら顧みよ。彼銀を殿に擲ちて出で、往きて自ら縊れたり。司祭諸長銀を取りて曰へり、之を殿の庫に納るるは宜しからず、是れ血の價なればなり。乃相議して、此を以て陶人の田を買ひ、賓旅を瘞る地と爲せり。故に其田は、今日に至るまで、血の田と稱へらる。是に於て預言者イエレミヤを以て言はれし

こと應へり、曰く、彼等銀三十、乃値を附けられし者、即イズライリの諸子が値を附けし者の價を取りて、之を陶人の田の爲に與へたり、主の我に示ししが如しと。イイスス方伯の前に立ちしに、方伯彼に問ひて曰へり、爾はイウデヤ人の王なるか。イイスス之に謂へり、爾言ふ。司祭諸長と長老等と彼を訟へしに、一も答へざりき。時にピラト彼に謂ふ、爾に對して證すること斯く多きを爾聞かざるか。彼其一言にも答へざりき、方伯甚奇しむに至れり。節期には、方伯が民の一人の囚、其欲する所の者を釋す例ありき。其時ワラウワと名づくる著しき囚ありしが、民の集まりし時、ピラト之に謂へり、二人の中、我が誰をか爾等に釋さんことを欲する、ワラウワか、抑ハリストスと稱ふるイイススか。蓋娟嫉に因りて彼を解ししを知れり。方伯が審判座に坐せる時、其妻人を遣して、之に謂へり、爾此の義人に何事をも爲す勿れ、蓋我今日夢の中に彼の爲に多く苦しめりと。然るに司祭諸長と長老とは民に唆めて、ワラウワを釋し、イイススを滅さんことを乞はしめたり。方伯彼等に問ひて曰へり、二人の中、我が誰をか爾等に釋さんことを欲する。彼等曰へり、ワラウワを。ピラト曰く、然らば我はハリストスと稱ふるイイススに何を爲さんか。皆彼に謂ふ、十字架に釘せらるべし。方伯曰へり、彼は何の悪を行ひしか。然れども彼等愈號びて曰へり、十字架に釘せらるべし。ピラトは何事も益なく、惟亂の滋起るを見て、水を取り、民の前に手を盥ひて曰へり、我此の義人の血に對して罪なし、爾等自ら顧みよ。民皆對へて曰へり、其血は我等及び我等の子孫に歸すべし。其時ワラウワを彼等に釋し、イイススを鞭ちて、十字架に釘せん爲に付せり。時に方伯の兵卒イイススを曳きて、公廨に入れ、全營を彼の許に集め、其衣を褫ぎて、**絳**き袍を衣せ、棘の冕を編みて、其首に

冠らせ、葦を其右の手に持たせ、彼の前に跪きて、彼に戯れて曰へり、イウデヤ人の王、慶べよ。又彼に唾し、葦を取りて、其首を撃てり。既に戯れ畢りて、其袍を褫ぎ、故の衣を衣せ、十字架に釘せん爲に彼を曳き往けり。出づる時、キリネヤの人シモンと名づくる者に遇ひ、之を強ひて、其十字架を負はしめたり。ゴルゴファと云ふ處、譯すれば、髑髏の處に來りて、醋に膽を和へて、彼に飲ましめたるに、之を嘗めて、飲むことを欲せざりき。彼を十字架に釘せし者は鬮を取りて、其衣を分ち、而して坐して、彼處に彼を守れり。又其罪を書せる標を其首の上に置けり、曰く、此れ乃イイスス、イウデヤ人の王と。其時二人の盗賊は彼と偕に十字架に釘せられたり、一人は其右、一人は其左なり。懸けられたる犯罪者の一人彼を誚りて曰へり、爾若しハリストスならば、己と我等とを救へ。他の一人之を戒めて曰へり、爾豈神を畏れざるか、蓋爾も同じく定罪せられたり、惟我等に在りては當然なり、我が行に稱へる事を受くればなり、然れども彼は一も不善を行はざりき。乃イイススに對ひて曰へり、主よ、爾の國に來らん時、我を記念せよ。イイスス彼に謂へり、我誠に爾に語ぐ、爾今日我と偕に樂園に在らん。過ぐる者彼を誚り、首を揺かして曰へり。殿を毀ちて三日に之を建つる者よ、己を救へ、若し爾神の子ならば、十字架より下れ、同じく司祭諸長も、學士、長老、ファリセイ等と偕に嘲りて曰へり、他人を救ひて、己を救ふ能はず、若し彼イズライリの王ならば、今十字架より下るべし、然らば我等彼を信ぜん。神を恃めり、若し神彼を悦ばば、今彼を拯ふべし、蓋彼は我神の子なりと云へり。彼と偕に十字架に釘せられたる盗賊も亦彼を詬れり。第六時より晦冥は全地を蔽ひて、第九時に至れり。第九時の頃、イイスス大聲に呼びて曰へり、「イリ、イリ、ラマ、サワ

ファニ」即我が神よ、我が神よ、何ぞ我を遺てたる。彼處に立てる者の中、或人之を聞きて曰へり、彼はイリヤを呼ぶなり。其中の一人直に走り、海絨を取りて、醋を盈たし、葦に束ねて、彼に飲ましめたり。

餘の者曰へり、姑く舍け、イリヤ來りて、彼を救ふや否やを觀ん。イイスス復大聲に呼びて、氣絶へたり。視よ、殿の幔は、上より下に至るまで裂けて、二となり、地震ひ、磐裂け、墓啓けて、寢ねたる聖人の身は多く復活し、彼の復活の後、墓より出でて、聖なる城に入り、多くの者に現たり。百夫長及び之と偕にイイススを守れる者は、地震と有りし事とを見て、甚しく懼れて曰へり、此れ誠に神の子なり。其日は備節日にして、彼の安息日は大なる日なるに因りて、イウデヤ人は安息日に屍を十字架に留めざらん爲、ピラトに、彼等の脛を折りて、屍を取り下さんことを請へり。故に兵卒來りて、彼と偕に十字架に釘せられし第一の者の脛を折り、第二の者にも亦然せり。イイススに來りて、其已に死したるを見たれば、彼の脛を折らざりき、然れども一人の兵卒戈を以て其の脅を刺せり、忽血と水と出でたり。見し者は證を作せり、其證は眞なり、彼は言ふ所の眞なるを知る、爾等をして信ぜしめん爲なり。蓋斯の事の成りしは、聖書の應ふを致す、云く、其骨は折られざらんと。聖書の他篇に又云ふ、彼等は其刺しし者を觀んと。彼處に亦多くの婦ありて、遥に望めり、是れガリレヤよりイイススに從ひて、彼に事へたる者なり。其中にマリヤ「マグダリナ」、イアコフ及びイオシヤの母マリヤ、又ゼワェデイの子の母ありき。日暮るるに及びて、アリマフェヤの富める人、名はイオシフ、自も亦イイススに學びし者は來れり。彼ピラトに就きて、イイススの屍を求めたれは、ピラト屍を與へんことを命ぜり。イオシフ屍

を取りて之を潔き布に裹み、之を磐に鑿ちたる己の新なる墓に置き、大なる石を墓の門に轉して去れり。マリヤ「マグダリナ」と他のマリヤと彼處に在りて、墓に對ひて坐せり。

詠隊　主よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

【重連祷】

輔祭　我等皆霊を全うして曰はん、我等の重いを全うして曰はん、　**（詠）　主憐めよ**

輔祭　主全能者、吾が列祖の神や、爾に祷る聆き納れて憐めよ、　**（詠）　主憐めよ**

輔祭　神や爾の大いなる憐に因りて我等を憐めよ、爾に祷る聆き納れて憐めよ、（詠）　**主憐めよ　（３次）**

輔祭　我が国の天皇及び国を司るものの為に主に祷らん、

輔祭　又教会を司る我等の主教（　　）及びハリストスに於ける悉くの我等の 兄弟の為に祷る、

輔祭　又恒に記憶せらるる福たるこの聖堂の建立者、及び已に寐りし悉くの父祖兄弟、 此の處と諸方とに葬られたる正教の者の為に祷る、

輔祭　又我等の兄弟、諸司祭、諸修道司祭、及びハリストスに於ける我等の衆兄弟の為 に祷る、

輔祭　又此の至尊なる聖堂に者を献り、善業を行ひ、之に労し、之に歌ひ、及び此に立ちて爾の大にして豊なる憐を仰ぎ望む者の為に祷る、

司祭　蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光栄を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、

（詠）　「アミン」

誦経　主よ、我等を守り、罪なくして此の晩を度らせ給へ。主吾が先祖の神よ、爾は崇め讃められ、爾の名は世世に尊み歌はる、「アミン」。

主よ、爾を恃むに因りて、爾の憐を我等に垂れ給へ。主よ、爾は崇め讃めらる、爾の誡を我に訓へ給へ。主宰よ、爾は崇め讃めらる、爾の誡を我に悟らせ給へ。聖なる者よ、爾は崇め讃めらる、爾の誡にて我を照し給へ。

主よ、爾の憐は世世に在り、爾の手の造りし物を棄つる勿れ。讃は爾に歸し、歌は爾に歸し、光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

［増連祷］

輔祭　我等主の前に吾が晩の祷を増し加へん、　**（詠）主憐めよ**

輔祭　神よ、爾の恩寵を以て我等を佑け救ひ憐み護れよ、　**（詠）主憐めよ**

輔祭　此の日の純全、成聖、平安、無罪ならんことを主に求む、　**（詠）主賜へよ**

輔祭　平安の天使、正しき教導師、吾が霊体の守護者を賜はんことを主に求む、

輔祭　我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、

輔祭　我等の霊に善にして益ある事、及び世界に平安を賜はんことを主に求む、

輔祭　我等の生命の余日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む 、

輔祭　我等の生命の終が「ハリスティアニン」に適ひ、疾なく、恥なく、平安なること、及びハリストスの畏る可き審判に於て宜しき對をなすを賜はんことを求む、

輔祭　至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光栄の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、

（詠）主爾に

司祭　蓋爾は善にして人を愛する神なり、我等光栄を爾父と子と聖神°に献ず、今も何時も世世に、

（詠）「アミン」

司祭　衆人に平安、　**（詠）爾の神°にも**

輔祭　我等の首を主に屈めん、　**（詠）主爾に**

司祭　願くは爾父と子と聖神°の国の権柄は讃揚讃栄せられん、今も何時も世世に、

（詠）「アミン」

［挿句の讃頌］４章を歌ふ。第2調。　『三歌齋経』P1144

ハリストスよ、アリマフェイは爾萬有の生命たる者を死者として木より下し、没薬と布とを以て爾を裹み、愛に慫められて、心と口とを以て爾の朽ちざる體に接吻せしが、亦畏懼に支へられて、喜びて爾に籲べり、人を愛する主よ、光榮は爾の寛容に歸す。

句　主は王たり、彼は威嚴を衣たり。

衆の贖罪主よ、爾が衆の爲に新なる墓に置かれし時、辱しめられたる地獄は爾を見て懼れ、柱は折かれ、門は破られ、柩は啓かれ、死者は起きたり、其時アダムは感謝の心を懐き、喜びて爾に籲べり、人を愛する主よ、光榮は爾の寛容に歸す。

句　故に世界は堅固にして動かざらん。

ハリストスよ、爾は神の性に形り難く限り難きを存して、肉體を以て甘んじて墓に閉ぢら

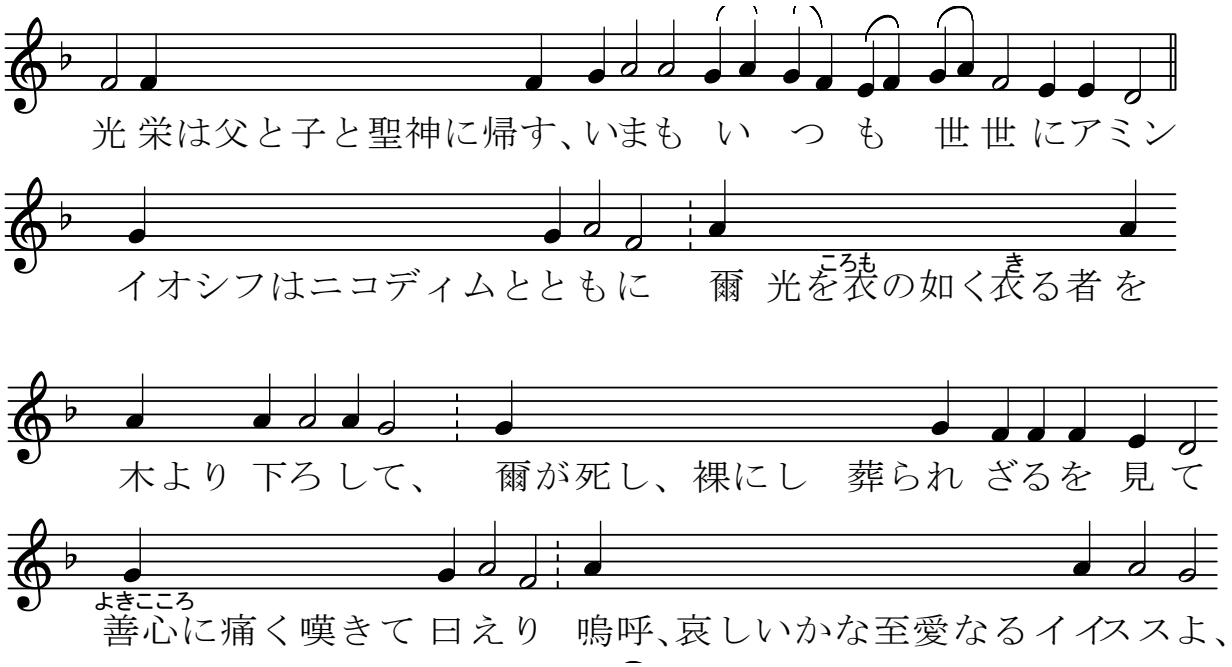
れし時、死の庫を閉ぢ、地獄の國を悉く空しくせり、其時爾は此の「スボタ」にも神聖の祝福と光榮と光明とを被らせ給へり。

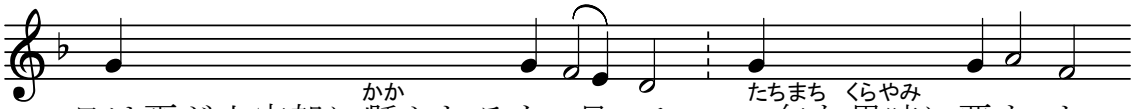
句　主よ、聖徳は爾の家に属して永遠に至らん。

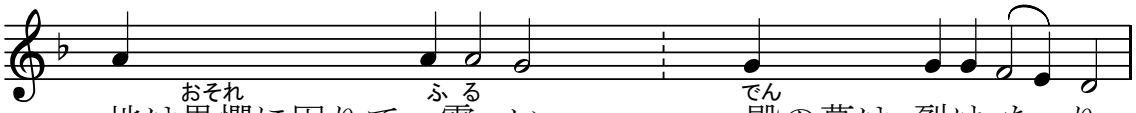
ハリストスよ、天軍は爾が不法者より惑はす者と誣ひられ、爾の朽ちざる脅を刺したる手にて墓の石の封ぜられしを見て、爾の言ひ難き寛忍に驚き畏れしが、亦我等の救の爲に喜びて爾に籲べり、人を愛する主よ、光榮は爾の寛容に歸す。

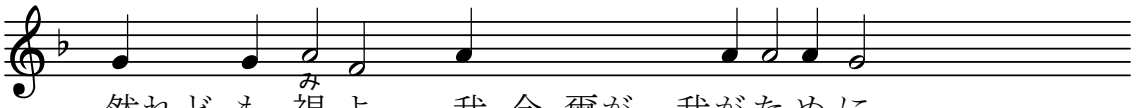
光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン、（第５調）

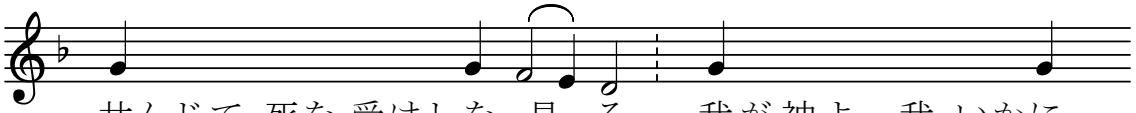
イオシフはニコディムと偕に爾光を衣の若く衣る者を木より下して、爾が死し裸にし葬られざるを見て、善心に痛く歎きて、泣きて曰へり、嗚呼哀しい哉至愛なるイイススよ、日は爾が十字架に懸れるを見て、忽黒暗に覆はれ、地は畏懼に因りて震ひ、殿の幔は裂けたり。然れども視よ、我今爾が我が為に甘じて死を受けしを見る。吾が神よ、我何如に爾を葬り、或は何如なる布を以て爾を裹まん。洪恩なる者よ、我何如なる手を以て爾の朽ちざる身に觸れん、或は何如なる歌を以て爾の逝世を歌はん。我爾の苦を崇め讃め、爾の歛瘞と復活とを讃め歌ひて籲ぶ、主よ、光栄は爾に帰す。（此の讃頌を歌ふ時、輔祭は蠟燭を持ち、司祭は香爐を執りて、寶座に置かれたる主の就寝聖像の前に爐儀を行ひて、三次之を匝る。）

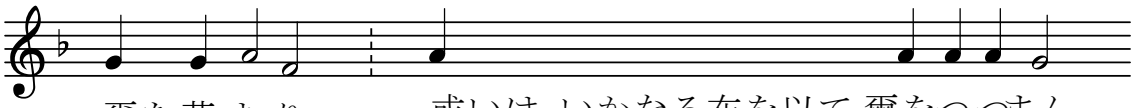


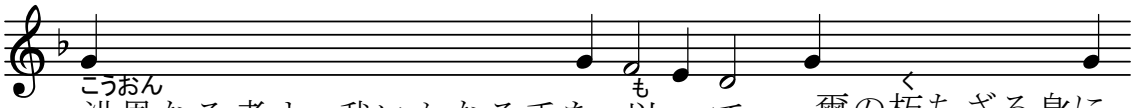


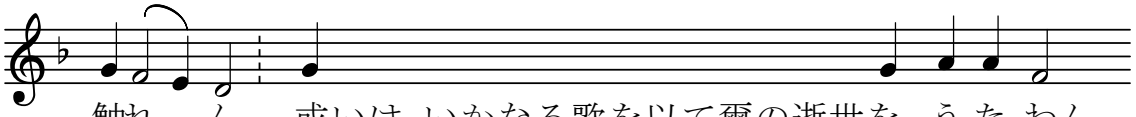


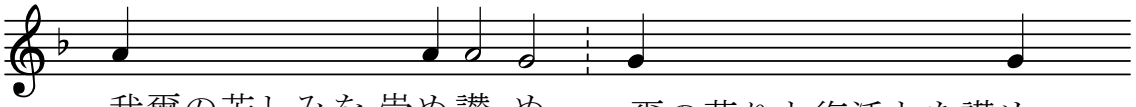


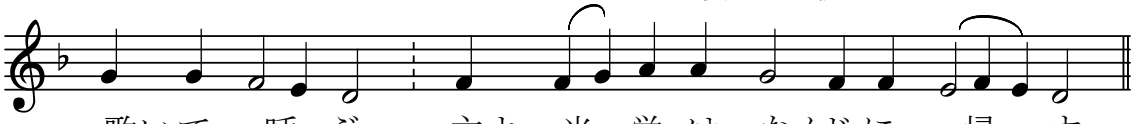












右の讃歌を歌ふ時、司祭は寶座に置かれたる主の就寝聖像の前に爐儀を行ひて、三次　　之を回る。

誦經　主宰よ、今爾の言に循ひて、爾の僕を釋し、安然として逝かしむ。蓋我が目は爾の救を見たり、爾が萬民の前に備へし者なり、是れ異邦人を照す光、及び爾の民イズライリの榮なり。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

主憐めよ。三次

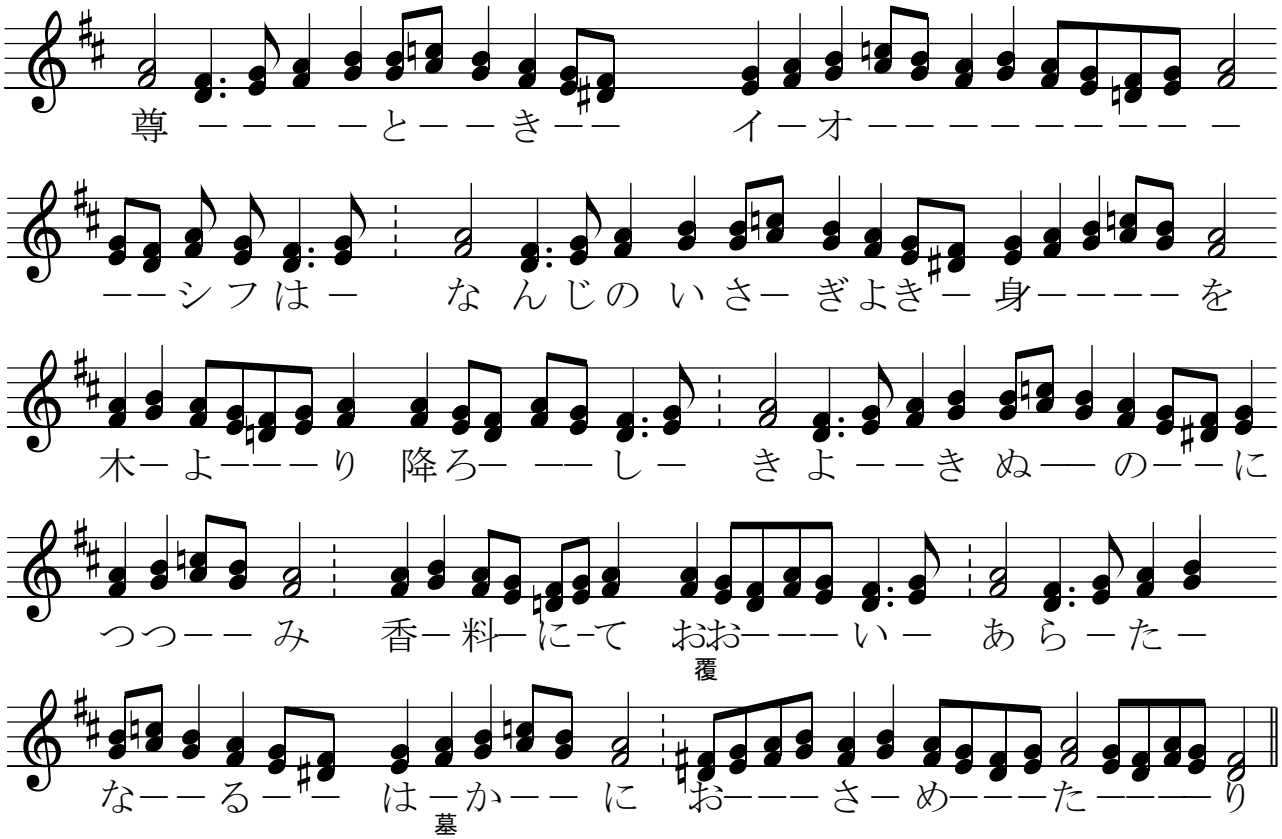
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。

司祭　蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

（詠）　「アミン」［トロパリ］２調

尊きイオシフは爾の潔き身を木より下ろし、浄き布に包み、香料にて覆い、新たなる墓に蔵めたり。



司祭　　睿智

（詠）　福を降せ

司祭　　永在の主ハリストス我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時(いつ)も世世に、

（詠）　「アミン」神よ、我が国の天皇と、正教会の教えと、正教のすべてのハリスティアニンを、永くまもり給へ。

司祭　　至聖なる生神女よ、我等を救ひ給へ、

（詠）　ヘルワィムより尊く、セラフィムに並なく栄え、貞操を壊らずして神言を生みし実の生神女たる爾を崇め讃む。

司祭　　ハリストス神我等の恃(たのみ)よ、光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す。

（詠）　光栄は父と子と聖神°に帰す、今も何時も世世に、「アミン」

主憐めよ（三次）。福を降せ。

司祭　　［発放詞］

我等人々のため、及び我等の救いのために畏るべき苦しみと生命を施す十字架と自由のほうむりとを身に受けたまいしハリストス我等の真の神は、其至浄なる母、（　　）、光栄にして讃美たる聖使徒聖（　　）、聖にして義なる神の祖父母イオアキムとアンナ及び諸聖人の祈祷に因りて我等を憐み救はん、彼は善にして人を愛する主なればなり。

（詠）　［萬寿詞］

「アミン」神よ、我が国の天皇、及び国を司る者、我等の（府）主教（　　）及び悉くの正教のハリスティアニン等を幾歳にも護り給へ。